

本を読み続ける人の姿

奈良 敏行

小冊子『音信不通』に書き始めて、九年近くが過ぎた。

ピオトープという言葉を知って、本屋をそのようなものとして見直してみたい、というのが衝動の初発だった。そして何の準備もなく、ミニコミの小さな世界にとりかかった。それは二〇一六年七月のことだった。読み返したら第一回の文章の末尾にこんなことを書き付けていた。

《思いつきが、ここに火を点す。現実は何ももう変わらな
い。》見立ては、でも心象風景を一変させることもある。》
書き始めて七年が過ぎて本屋を閉じた。店舗は終了したが、ミニコミや読書会は継続している。本屋に被せたピオトープという霞が消えることなくそのまま漂いつづけている。いま自分は何をどういう形で考えればいいのかという。

見出した結論は、「見立て」と平行して「本を読み続ける」ということを求め続けなければならない、という簡単なことだ

った。新しいものでなく、もともとそのように生きてきたのだから、原点に帰ればよいだけのことだった。

本屋を閉じる、でもその後をどう生きる、と思ったとき、自然に見えてきた光景が、「淡雪」と「沫雪」の入れ子構造の世界だった。縮減して入れ子の中に移行すればいいと希望が持てた。

生成変化（見立て）が定有堂のオブセッション（欲動）だと言いつづけたが、現在は「笈（おい）」という言葉を見つけ出している。背中に負う本箱と、辞書は教える。背負うのは行脚僧、修験者だ。芭蕉に「笈の小文」という書き物がある。笈で運んだ雑録（小文）だ。

近くの本屋さんの一角にひと箱分の棚貸しを設けてくれた月が過ぎた。このひと棚を「笈の定有堂」「笈の本や」と見做していいのではないかと考える。縮減の一つの姿だ。この「笈」の棚でわたしは相変わらず読者と共にある。好きだから続けているという単純な姿だ。

本を読み続ける。読み続けているのだが、時に迷いがある。乱読しているゆとりはないのではないか。出口を見据えた読書が必要なのではと思ひ悩む。

そんなときある人から手紙をもらった。悩みを話したわけでもないのに、真っ直ぐな答えだった。お互い本が好きなのだが、共有すべき発見をしたので伝える、という好意

と受けとめた。フランス革命の嵐の中で処刑される或る人の、本を読み続ける小さな宝石のような逸話だった。出来事はこんなふう書き伝えられている。

《死刑執行人サムソンによる話。断頭台につれてゆかれるシャロスト公爵、馬車の中でずっと本を読んでいた。いよいよ階段を上る段になって、ページの端を折った。》

階段の上にあるのはギロチンだ。出典元のコピーも添えてあった。『万国奇人博覧館』の一エピソードだった。本を読み続ける人の出口を明確に教わった。何を読むかではない、どのように読むかだ。すべての書物は本を読む人に報いを与えてくれる。本を読み続けるということはそういうことだ。

シャロストという、本を読み続ける人の姿には覚悟というような重々しいものはない。呼ばれば我が事は終える。そんな軽さがここには漂う。

本を読み続ける、そして十分に報われている人の姿がここにある。「呼び出しの声あるとき、ページの端を折る」、本を読む人の合い言葉ですね、と教えてくれた人に返事した。

「笈の定有堂」の中の小文（抜き書き）を蓄える。そしてそれを伝えたい。伝える読書がわたしには似つかわしい。パスカルの『パンセ』からの抜き書き（小文）だ。

《取るに足らないことが、わたしたちを塞ぎ込ませるのと同じ理由で、取るに足らないことがわたしたちの慰めになる。》（断章一三六）

読書に報いられ、糧をえる。

本屋という営みの「端を折って」「まちなか」に生きる。シャロストとは違ってまだ終わりではない。「笈の定有堂」「笈の本や」という見立てに舞台が回り続ける。呼び出しの声はまだ聞こえない。縮減の果てに手にした「ゆとりと戯れ」の時間を大事にしたい。

2024.12.08

（参考）

ギイ・ブクテル ジャン・クロード・カリエール 守能
信次訳

『万国奇人博覧館』 筑摩書房 1996

鹿島茂『『パンセ』で極める人間学』三三三新書 2022